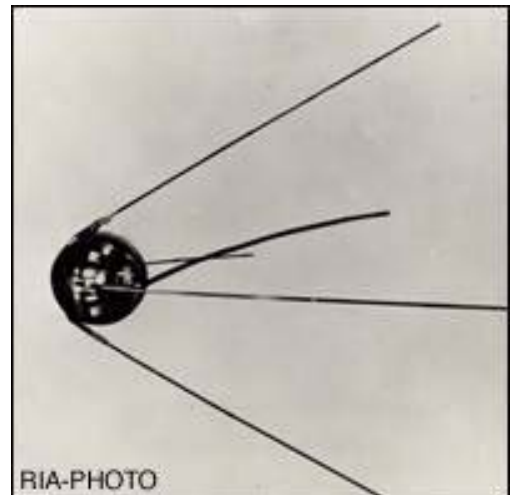


本シリーズはこれまで衛星通信に係った方々が、それぞれの思いを込めて格調高く執筆されて来た。今回、本企画をお受けするにあたり、内容に制約がない、との事でお引き受けしたが、バックナンバーを読み返すたびにその格調の高さに改めて逡巡を覚える。しかし、折角の機会なので、私の衛星通信に係った30年弱の出来事を、思い出すまま書き連ねさせて頂くこととしたい。

### (1) 子供の頃の記憶

私が宇宙を記憶しているのは、三つくらいである。ソ連の人工衛星スプートニク号の打上げ、アポロ11号の月面着陸、おおすみの打上げ成功である。他にも、ガガーリン、テレシコワ宇宙飛行士の「地球は青かった」、「私はカモメ」なども記憶に残っているが、やはり前三者が印象深い。

スプートニク号は1957年10月4日に打上げられたが、私はまだ小学校にも上がっていない。さらに打上げのカウントダウンが中継されているはずもないので、1957年の記憶はほとんどない。日本にこのニュースが伝わったのはいつごろなのか不明だが、なぜか小学校の理科のノートの口絵に載っていたのを鮮明に覚えている。欲しかったノートが買って貰えなかったのだろうか。打上げから6～7年経ったあとの話した。余談だが、今はニュースが早すぎるような気がする。湾岸戦争のときはCNNが現地からの映像を伝え、ピンポイント攻撃の様子を米軍は映像で伝える。今回のWTCビルに端を発したイラクとの緊張も、「早すぎるニュース」で伝えられるのだろうか。



スプートニク号



Edwin Aldrin飛行士の第一歩

アポロ月面着陸は1969年7月21日 午前5:17(日本時間)、これも生中継ではなかったが夕方学校から帰って、あるいは夏休みが始まっていたのかもしれないが、テレビの録画中継を見たことを覚えている。最近、真偽を疑う声もあるようだが、きっと月面に人類は立ったのだろう。同時中継ではなかったにしろ、妙に交信開始音の「ピー」と言う音と、西山千さんの同時通訳の声が懐かしい。記念になるだろうと、オープンリールのテープレコーダーに録音して暫く大切に保管していたのだが、度重なる引越して最近顔を見なくなった。

「おおすみ」の打上げ成功は、日本の宇宙開発の正に第一歩だったと記憶している。戦前までの零戦や大和など、鉄、造船、航空などの技術はそれなりに高い力を持っていたと思われるが、戦後の開発・製造の禁が解け、YS - 11等とともに日本の航空宇宙工業が立ち直りつつあったのがこの時期だったと記憶している。

糸川博士によるペンシルロケットからの開発史は、別の機会にするとして、1970年2月11日、この日が建国記念日の祝日になっていたかどうかは記憶の外だが、当時の東大宇宙研が24kgの衛星を近地点350km、遠地点5140kmの軌道に投入した事は記憶に新しい。人類月面到達の次の年だ。名前も、射場のある内之浦、大隈半島から来ているとの事で、なにやらカタカナ文字でないあたりに自国の技術を感じた。

## (2) 社会人一年生

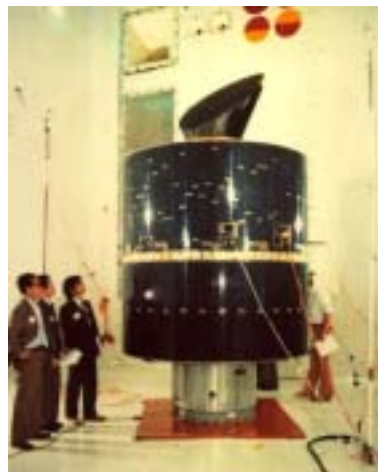
子供の頃から電気屋さんになりたいと思っていたが、衛星の仕事をするなんて夢にも思っていなかった。しかし、どういう訳か会社に入ってから、衛星の研究をするようになった。

電電公社では昭和40年代後半から、衛星を通信手段として利用することを念頭に、衛星通信の研究開発に着手した。私が電電公社の研究所、当時は通研と呼んでいたが、に配属された頃は、官民一体となって通信衛星(CS、さくら1号)の開発と、それをを用いた通信実験の準備に余念がなかった。

当時、衛星通信に利用できる周波数は、地上のマイクロ回線が高度に発達しており、それへの干渉を避けるとの主旨から、Ka帯、C帯が主な周波数帯域であった。1977年12月15日、CSはデルタロケット2914に搭載され、打上げに成功した。打上げ時間は日本時間で9:47分との事であるが、私の記憶は若干違っていて、職場のお茶のみ所で皆でTVを見ていたような気がする。きっと打上げに立ち会った先輩が帰国し、打上げのビデオ映像を見ていたんだと、今にして思うが、記憶の中では『同時中継』だった。打上げの様様を見る機会の少なかった当時、この映像は非常に印象的だった。「いつかは立ち会いたいな」と素直に思った。

このCSの開発、ならびに通信実験の陣頭指揮を取っていた方々が、今でも私の身近で衛星通信の発展に貢献されている。このようなお姿を拝見するに付け、本当の頭の下がる思いである。きっと、敗戦の混乱から我が国を立て直すには技術立国しかない、と肌身に感じて国をリードして来られたのではないだろうか。

(次号につづく)



CS



CS打上げ

(NASDAホームページより)